



時を重ねなければ  
見えぬ景色がある

小川  
悟

## はじめに

目覚めると、「夢だったか」と思う。

夢と現実の間をはさま行き来しているうちに、今の自分の立ち位置が分からなくなってしまう。これまで積み重ねてきた年月も夢だったのか。

まどろみが溶けて、初めて、自分は何十年も生きてきたのだと確信する。

夢か現か。

これまでの年月が現であつたにしても、この宇宙が創つてきた時間からすれば、目の前にある現実は夢のようなものかもしれない。「人生百年時代」と言われるようになったが、七十代を生きる男にとって、残された時間は「一瞬」と言つてよい。

父が亡くなつた年齢に近づき、その頃母が言つていた言葉を思い出す。

「おし（お前）も、この年になつてみよ。」

できないことが増え、自分自身にいらだつていた母が、息子に浴びせた言葉である。その当時は聞き流していたが、今になつて妙に胸に突き刺さる。

あの言葉を聞いた年齢になってやっと分かるようになったのだと思う。あの頃は、目の前に見えることは誰もがそのように見えると思っていたが、そうではないと知るようになった。目で見える景色も心でとらえる景色も、若い頃の景色とは随分違って見える。

数十年に一度だけ花を咲かせるリュウゼツラン（竜舌蘭）を思い出した。時期が来ると茎が一気に伸び、七メートル以上の高さになることもあるという。『幻の花』と呼ばれている。

時を重ねなければ花を咲かせない『幻の花』と今の自分が重なる。

周りの景色が変わって見えるようになった今だからこそ、書き記しておかなければならないと思った。

過ぎゆく時や、移りゆく季節の中で、自分は風の中に佇む一粒の人間である。そんな人間から見える景色が、「ものの見方」を考えるきっかけになればありがたい。

もくじ

はじめに

時来たる

思わぬ変化

十五夜より十三夜

理屈じゃあない

その人だけの風景

柳に風

壁と厄年

肉じゃがに入れてもらえない

おあいこ

介護 病氣 死

カスタマイズする

心に刺さるもの

10 12 15 18 20 22 25 29 31 35 38

## 景色が変わる

|                 |    |
|-----------------|----|
| センターラインが動く      | 42 |
| ネコと闘う           | 44 |
| 周辺にいる           | 47 |
| もともと独り          | 50 |
| 「あんな雲になりてえんだよ。」 | 52 |
| 「ないもの」から感じる豊かさ  | 56 |
| 時がくれた贈り物        | 59 |
| 目を開けているのに       | 62 |
| オモテとウラ          | 65 |
| 「ねらい」というもの      | 68 |
| 人の営みの小さきこと      | 72 |
| 夢はなくとも          | 74 |
| 好きだったものの周り      | 77 |
| 変わらないもの         | 80 |
| 「かく生きた」         | 83 |

## 夢か現か幻か

|            |     |
|------------|-----|
| 夢幻の如く      | 88  |
| 朝方の夢       | 90  |
| 時空という幻     | 94  |
| 記憶の奥底にあるもの | 98  |
| 「境」についてのお話 | 103 |
| 教育の残像      | 106 |
| 転居物語       | 111 |
| 勝ち負けの向こう   | 116 |
| 二つの渡し船     | 119 |
| 神々の世界へ     | 122 |
| 生死を想う      | 125 |
| 「空」のほとりで   | 129 |

## 花開く

|              |     |
|--------------|-----|
| 人間ってやつはおもしろい | 134 |
| 苔の声を聞く       | 137 |
| スポーツの常識に抗う   | 140 |
| 心ざわめく無言館     | 145 |
| ああ有馬記念       | 150 |
| 愚かなことを楽しむ    | 155 |
| 香りと人の思い      | 158 |

## あとがき

表紙絵——藤城信幸  
題 字——権田拓朗



時來たる



## 思わぬ変化

気恥ずかしくなっている。

もうだいぶ前のことになる。退職する年の卒業式に、中国の古典『烈士』にある「愚公、山を移す」という教えを、はなむけの言葉として送った。

内容は次のようなものである。

昔、愚公という老人がいた。愚公の家の前には二つの大きな山がそびえ立っていて、愚公は、日頃から出入りが不便で仕方ないと思っていた。あるとき、愚公は思い立って、山を切り崩しにかかる。息子と孫と三人がかりでモッコをかつぎ、北の海へ土を捨てにいくのだが、往復するのに半年もかかる。それを見て、近くに住む人が笑ったところ、愚公は、次のように言った。「わしが死んでも息子がいる。息子には孫ができる。孫が子どもをつくり、子々孫々受け継いで絶えることがない。しかし、山は今以上に高くはならない。平らにできないことがあるものか。」

これは、一見動かせないと思われる山でも、信念をもってあきらめずに削っていけ